



Title	実践としての日常、そして非日常 ―エスノメソドロ ジーの視点から芥川賞候補作『トラジェクトリー』を 読む―
Author(s)	岡田, 悠佑
Citation	大阪大学人文学林シンポジウム グレゴリー・ケズナ ジャットの芥川賞候補作を学際的に読む. 2026, p. 15-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105165
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

実践としての日常、そして非日常
—エスノメソドロジーの視点から芥川賞候補作『トラジェクトリー』を読む—
岡田悠佑（人文学研究科）

1. はじめに

グレゴリー・ケズナジャット氏による第 173 回芥川賞候補作『トラジェクトリー』は日常の物語である。日本で働くアメリカ人という点では、物語の語り手であるブランドンは、主な読者層である我々日本人から離れた存在ではあるものの、彼は決して何か特別なことができる非日常の存在でもない。また、そうした語り手が非日常の世界に巻き込まれていくような物語でもない。むしろ、我々が理解可能で共感可能などどこにでもある日常世界を、ブランドンの視点から描いた物語である。日常の社会学とも言われるエスノメソドロジー的会話分析を専門とする研究者として、日本文学や比較文学など、本来この物語を論じるのに適切な学術領域からすれば異質な学術的視点で『トラジェクトリー』の解題を試みる。まず、社会学の一分野であるエスノメソドロジーとは何かを提示したうえで、『トラジェクトリー』の中でブランドンが、彼のどのような日常をどのように実践しているのかを考察していく。

2. エスノメソドロジーからみた「日常」と「非日常」

エスノメソドロジーを創始したガーフィンケルの研究の中では、次のようなやり取りが報告されている。大学生の S と E はお互いに知人で、大学のキャンパスで E を見かけた S が E に陽気に手を振って接した場面でのやり取りである。

抜粋 1 (Garfinkel, 1967, p. 44)

(S) How are you?

(E) How am I in regard to what? My health, my finances, my
school work, my peace of mind, my . . . ?

(S) (Red in the face and suddenly out of control.) Look! I
was just trying to be polite. Frankly, I don't give a damn
how you are.

自身の “How are you?” という発話への E の応答に対して、なぜ S は怒りを露わにしたのだろうか。字義通りに「質問」として捉えれば、“How are you?” が指すところは曖昧であり、字面だけでその意味を解釈しようとするれば、E がその意味を確認することはありえな

いことではない。しかし、それは「ありえないことではない」だけであって、“How are you?” がなしている行為は「挨拶」として解釈することが期待されているものであり、字義通りに相手について尋ねている「質問」ではないと理解することは当然である。字義通りの場合の不十分さを考えれば、“How are you?” を「質問」として捉えることが当然な日常世界の存在を考えることは難しいだろう。こうした前提のもと、S の “How are you?” を「挨拶」と捉えて「挨拶」を返すのではなく「質問」として捉えてその不明瞭な意味を尋ねる E の行為に対して、S がそれを「からかい」と捉えて怒るのは無理もないこと、と言えるだろう。

こうした「当然」とされる行為としての発話の意味を攪乱させたり家族と暮らす自分の家で下宿人のように過ごさせるような違背実験の結果から、ガーフィンケルは人々が言葉の意味や特定の場面での振舞いなど様々なことに対して、何をどのようにすることが当然なのか、ということに関する背後期待を持っていること、そしてその背後期待を参照することで、不明瞭で曖昧なようにも捉えることのできる日常を人々は問題なく実践していることを明らかにした。つまり、日常とは日常を行うやり方によって都度実践的に構築されているものだ、ということである。エスノメソドロジーはこうした、社会に暮らし日々社会生活を営んでいる「人々の (ethno-) 方法 (methodology)」を明らかにすることを目指した社会学であり、エスノメソドロジ的会話分析はその焦点をやり取り (talk-in-interaction) に当てたものである。

上記抜粋 1 が示すことはもう一つある。それは「非日常」も「日常」として解釈され対処されるということである。“How are you?” の質問としての不明瞭さを問いただすという日常とは異なる E の行為について、S は日常の行為から離れていることへの合理的理由を当てはめて解釈し対処している。S は、E が純粋に「質問」として捉えたうえで回答を目指そうとしているのではなく、日常的な解釈を分かった上でわざと「質問」と捉えて「からかい」を行っていると解釈し、そうした E に対して怒りを露わにする、という方法で対処している。社会生活を営む人々にとって「非日常」は「日常」を支える背後期待をもとに理解されるもの、あくまでも日常を「日常」として営む方法でもって、人々は非日常を日常とは異なるものとして意味づける、ということである。

こうした背後期待は唯一絶対のものが存在し、社会の成員全てがそれを常に参照している、ということではない。複数の背後期待が同時に存在することを用いて、自分たちがいかに違うのか、ということを示すことも人々の実践の一つである。それは、誰かの視点から見た日常とは異なる、ある意味での「非日常」を生きていることを示すこととなる。次の抜粋 2 は、1960 年代のアメリカのいわゆる “teenager” と見なされる参与者によるやり取りである。

抜粋 2 (Sacks, 1979, p. 7)

Ken: In that Bonneville of mine. I c'd take that
thing out, an' if I've gotta tie;, an' a-a
sweater on, an' I look clean? (1.0) Ninedy
nine percent a' the time a guy c'd pull up
to me, in the same car, same color, same
year the whole bit, (1.0) roar up his pipes,
(1.0) and he's inna dirty grubby tee shirt,
an' the guy'll pick the guy up in the dirty
grubby tee shirt before uh he'll pick me
up.

(2.0)

(): hheh

Ken: J'st- Just for II. uh-

Al: (Bu') not many people get picked up in a
Pontiac station wagon.

このやり取りの中で Ken は、自分が同じような車に乗っている同じような他人にレースを挑まれるだろうこと、路上自動車レースを行うことで同じカテゴリーの担い手であることをしていてもそのカテゴリーは大人には見えず、服装 (小綺麗な格好と薄汚れた格好) という異なる視点で認識されることを理解していること、そして Al も Ken と同じカテゴリーに属しているからこそ自分の話が理解できるという前提でこの話をしていること、これら三つのことを示している。そして Al も応答によって Ken の前提が適切であることを証明している。

このやり取りの要点は、Ken と Al は自分たちを 'teenager' というカテゴリーで括る大人からは見えない、'hotrodder' という路上自動車レースに興じるカテゴリーの担い手であり、自分たち自身でそのカテゴリーの一員としての日常を生きていることを実践している、ということである (Sacks, 1979, pp. 13-14)。それは、あるカテゴリーの担い手として適切なやり方 ('hotrodder' であれば、同じような車を見かけた際には路上レースを仕掛けること)

を実践することで、人は自らをそのカテゴリーの一員として示すことが可能であることを意味する。そしてそうすることで、人は誰かからのお仕着せの日常ではない日常を生きること、独自のアイデンティティを実践することが可能となる。Ken と AI のやり取りが示すのは、人々は誰かの視点からの日常を否定し、新たな日常という意味での非日常を構築することができる、ということである。

人々は、言葉や振舞い、場面や状況に対して有している背後期待を巧みに用いることで、お互いの発話や振舞いを理解可能なものとしており、そこには一定の方法が存在する。背後期待を参照することによって、人々の日常は実践的に構築されているが、背後期待とは同時に複数存在しうるものでもある。だからこそ、あるカテゴリーの担い手であることを適切に実践することで、社会の中で一つの集団が共有している背後期待では捉えきれない存在であるということを訴えることも、その集団が依拠する背後期待を転覆させるような革命的な試みを行うことも可能となる。社会を覆う何か大きな存在や、内面に刻み込まれた社会規範に盲目的に従って日々を過ごす判断力喪失者 (judgmental dope)(Garfinkel, 1967, pp. 67-73) としてではなく、主体性をもって特定の日常や非日常を実践する行為者として人々を捉えるのが、エスノメソドロロジーの視点がある。

3. ブランドンの実践する日常

『トラジェクトリー』の多くは名古屋の英会話学校で教師として働いているブランドンの語りで占められている。教師としての訓練を受けたり専門として学んだりしたことがなく、日本に來たことも日本語を学んだこともなかった彼にとって、日本での生活も教師としての仕事もそれまでの日常とは異なる新しいもの、非日常として捉えられただろう。それは彼の同僚であるレベッカが着任してすぐの頃の何に対しても新鮮に驚く彼女の様子に対して、「みんな最初の頃はこんな感じだな」(本文 17 頁)、というブランドンの描写からも伺える。しかし来日三年後の彼は日常にないものとして非日常を求めつつも、結局はそうした非日常を日常の中に埋めている。それは彼の語りの中で多くを占めているカワムラさんという英会話学校の生徒とのやり取りから明らかである。

社会人相手の上級クラスでのグループレッスンとマンツーマンレッスンを担当しているブランドンにとって、カワムラさんは担当して二年目の生徒である。カワムラさんとのマンツーマンレッスンでは彼からの提案により、アポロ 11 号月面まで船内記録を三人の船員に成り代わって読み合う、という形でレッスンを行なっている。ブランドンはカワムラさんに対して、「生徒は全員どちらかと言うと内気で、なかなか自分の方から発言したがないタイプだったから、最初はカワムラさんの積極性を新鮮に感じた」と当初は他の生徒とは違っていること、その非「日常」性を好意的に捉えていたものの、1 年後には「魅力を感じなくなった」としている (本文 31 頁)。

そうしたカワムラさんへのブランドンの評価が独白されるのは本文 29 頁から 32 頁での彼とのレッスンの中である。ハッセルブラッド (カメラ) を探しているアポロ 11 号の船員

のやり取りを声を出して読み合う中で、カワムラさんが読み合いから離れて、カメラを探しに行く際に船員が使った“expedition”という言葉についてブランドンに質問している。ブランドンは「“travel” みたいな意味」と答えるが、それはカワムラさんの求めている答えではない。カワムラさんは日本語に切り替えて、なんでここにそんな言葉を使っているのか、と追求する。ブランドンはカワムラさんの日本語をよく理解できないまま、とにかくカメラを探しに行くという意味はないですかね、と答える。しかしカワムラさんは納得せず、舌打ちをしてため息をつくという否定的な態度を示して、なぜ狭い船内で“expedition”という言葉を使うのか、使い方が明らかに間違っている、と返す。ブランドンは、比喩的に使うこともあります、と伝えるが、それでもカワムラさんはやはり納得しない。ブランドンが、言葉はたまには矛盾するのではないのでしょうか、と言うとカワムラさんは意地悪く笑いながら日本語で、ネイティブはいい加減すぎる、と批判する。ブランドンは、生徒持参のテキストを使う場合はこちらで説明することには限界があります、と謝る。そうするとカワムラさんは、「逃げた。ミスター・ブランドンってすぐ逃げるんだからな」と笑う。ブランドンはそれを無視して、カワムラさんが持参したテキストである船内記録の次の行を読み上げる。

このブランドンとカワムラさんとのやり取りでは、カワムラさんはブランドンを〈ネイティブ〉というカテゴリーの一員として捉えていることがわかる (Sacks, 1979; Hester & Eglin, 1997 も参照)。そうして理解できない英語語彙の使用について、自分よりも英語についてより知識があるはずのもの、という認識的スタンス (Heritage, 2012a, 2012b) のもとでブランドンに尋ねている。だがブランドンはその求められた役割を適切に実践できていない。それでも、ブランドンは、生徒に尋ねられたことに応答する、という〈生徒—教師〉という教室では当然のものであるカテゴリーの組み合わせにそって、〈生徒〉であるカワムラさんと〈教師〉としてのやり取りを行う。最終的にカワムラさんが「逃げた。ミスター・ブランドンってすぐ逃げるんだからな」と〈ネイティブ〉や〈教師〉としてではなく、個人としてのブランドンを相手に否定的発言を面と向かって投げかけても、ブランドンはそれに応答せず、カワムラさんが持参したテキストである宇宙飛行士の記録を読み上げることで、あくまでも〈教師〉としての役割を続け、カワムラさんを〈生徒〉の一人として相手にしていく。

カワムラさんの否定的態度の明示、特にブランドン本人に対してのものはいわゆる〈生徒〉としてはあり得ないものであり、彼がいかに普通ではない存在であるのかを示す事例の一つと言えるだろう。しかし、彼の非日常性を否定的な意味で際立たせているのは、ブランドンが彼の仕事においては日常の枠組みである〈生徒—教師〉というカテゴリーペアに基づいて自身とカワムラさんの発言と振舞いを意味づけていることにある。そもそも、生徒 < 教師、であるという図式、知識量への認識的スタンスを当然とし、生徒が教師に尋ねて教師が教えるという役割に基づいたレッスンに固執する必要はない。例えば、1960年代のアメリカの若者が自分たちを大人からのお仕着せの‘teenager’ではなく、改造車でレ

ースを行うような‘hotrodder’という大人からは見ることができないカテゴリーの一員であることをなすことによって、押し付けられた日常に対して革命を試みていたように(Sacks, 1979)、ありきたりな〈教師〉から外れたやり方でレッスンを展開することで異なるカテゴリーを適切化することもできる。例えば、生徒が自主的に探求したことを教師に教えるという役割を担い、教師は生徒の学びの過程で手助けする役割を担うようなアクティブ・ラーニング型授業のレッスンを展開すれば、カワムラさんという非日常への異なる理解も可能だったのかもしれない。また、より違った関係性が築けた可能性もあっただろう。しかしブランドンは決して教師として優れている訳でもやる気がある訳でもない。彼は英語に関してより知識量が上だと思われている〈ネイティブ〉であるだけの〈教師〉という一般的な枠組みから脱け出すことはしない。だからこそ、カワムラさんが休んだために期せずしてフジワラさんとのマンツーマンレッスンとなった授業(本文 85-87 頁)について、「いつになく円滑に進んだ」と評価しているが、それはフジワラさんが質問をすれば予想通りの答えを返してくれて、さらにいい加減な解説でも受け入れてくれる〈優等生〉だったおかげだ、と理解しているのである。

このように、名古屋の英語学校で働くブランドンの日常世界の多くは、ごくありふれた〈ネイティブ〉であるだけの普通の〈教師〉を实践することで構築されている。日本語の本格的な勉強を始めてみたり、夜の住宅街で自分がそこに属していない者であることを確かめたり、ブランドンは同僚のネイティブ教師たちと同様に、普段通りの日常から脱け出そうとしているようである。しかし、名古屋という都市の問題でも英会話学校でのネイティブ教師という職業の問題でもなく、ブランドンの色褪せた日常は彼が自らそのように日常を繰り返しているからに他ならない。最終的にブランドンは英会話学校を辞め別の職についているが、その仕事がどのようなものなのか、どのような日常を彼が実践しているのかは語られない。そして、物語はブランドンが遠い過去のこととなった英会話学校時代に預かったままにしていたカワムラさんの日記を引っ張り出して読み始めるところで終わる。〈教師〉としてではない日常の中で、ブランドンはカワムラさんの日記を何者としてどう読むのか、どのように対話をするのか。そこで、ブランドンがどういう日常世界をいま生きているのか、何者としてどのようなアイデンティティを実践しているのか、ということが分かるはずだが、そこは読者の想像に任されている。

4. おわりに

本稿は、日常性の社会学であるエスノメソドロジイ的会話分析の視点から『トラジェクトリー』の解題を試みたものである。ブランドンだけでなく、彼の同僚教師のレベッカやスチュワート、英会話学校マネージャーのダイスケなど、『トラジェクトリー』の登場人物たちは、ここではない、これではない、という思いを抱えつつも「ここ」、「これ」の日常を繰り返している。アポロ 11 号の船員のように、ちょっとした探し物に対してあえて“expedition”のような大袈裟な表現を選択することで、壮大な事業の中にあるものとして

認識しながらごくありふれた日常を実践することは、ブランドンたちだけではなく読者である我々にとっても難しいことだろう。ブランドンを沈黙させた「ただのモラトリウムだね」(本文 101 頁) というレベッカの一言は、宇宙飛行士のような特別な非日常の存在ではない多くの人々にとっても十分に皮肉として機能するだろう。どこにも何にも発展しない日常を繰り返すことが「モラトリウム」を実践することだとするのなら、それを繰り返さない方法を見つけ実践できた時が、それまでとは異なる非日常へのトラジェクトリーを描く時だと言えるかもしれない。そしてブランドン (そしてレベッカとスチュワート) のように「辞める」という行動はそれまでの日常を繰り返す方法に終止符を打つ一つの手段と言える。英会話学校に戻って来なかったカワムラさんも同様に、新しい日常へと向かったのかもしれない。もちろん辞めた後の日常が新たなモラトリウムとなってしまう可能性も存在する。もしかするとカワムラさんの日記が、「昔はよかった」と懐かしむための玉手箱になってしまうような日常を、物語最後のブランドンは生きているのかもしれない。辞めずにいわゆる〈教師〉とは異なるカテゴリーを実践することで革命的に日常を変えたとしても、それはやはり同様にその新しい今までは非日常だったことが行き場のない日常となる可能性も十分にある。ブランドンのように過去を振り返るという行為は、どのような過去に対してどのような日常の中でどのような意味を成す「人々の方法 (ethno-method)」なのか。その後のブランドンを想像しながらこうした問いを考えることは、日々それぞれの日常を実践している我々読者に残された課題なのかもしれない。

参考文献

- Garfinkel, H. (1967). *Studies in ethnomethodology*. Prentice-Hall.
- Heritage, J. (2012a). Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *R Research on Language & Social Interaction*, 45(1), 1–29.
- Heritage, J. (2012b). The epistemic engine: Sequence organization and territories of knowledge. *Research on Language & Social Interaction*, 45(1), 30–52.
- Hester, S., & Eglin, P. (1997). Membership categorization analysis: An introduction. In S. Hester, & P. Eglin (Eds.), *Culture in action: Studies in membership categorization analysis* (pp.1–23). University Press of America.
- Sacks, H. (1979). Hotrodder: A revolutionary category. In G. Psathas (Ed.), *Everyday language: Studies in ethnomethodology*. Irvington Publisher.